

学級経営改善に関する研究

- 「学級の雰囲気と自己肯定感を把握する質問紙」(C & S 質問紙)の活用のための工夫を通して -

研究員 田所 直人

研究の背景

平成19年度「いじめや不登校を予防する学級経営改善に関わる研究」において、集団及び個の実態を客観的に把握し、いじめや不登校を予防する学級経営改善の在り方を提案するために「学級の雰囲気と自己肯定感を把握する質問紙」(以下C & S 質問紙とする)を作成した。その後多くの学校や学級で客観的な実態把握のためにC & S 質問紙が活用されるにいたった。しかし、実際に使用される中で「結果の見とり方の参考になるものがほしい」「実態を解釈するための資料がほしい」「低学年でも使用したい」「手軽に質問紙を実施できるようにしてほしい」などの様々な意見や要望を受けた。そこでより多くの学校や学級で学級経営改善のためにC & S 質問紙の活用をすることができるようにと考え本研究を行った。

研究の目的

C & S 質問紙の活用のための資料を調査研究をもとに作成する。またマークシート形式の質問紙や集計用プログラム等を作成し、質問紙の結果や日常観察から集団及び個の実態を把握しやすくするとともに、把握した実態に基づいた援助・指導、学級経営改善の在り方を提案する。

研究内容

- 1 C & S 質問紙の結果を見とるための資料を調査研究をもとに作成する
- 2 低学年用C & S 質問紙を作成する
- 3 SQS版(マークシート版)C & S 質問紙を作成する
- 4 SQS版(マークシート版)C & S 質問紙の専用集計プログラムを作成する

調査について

- 1 調査研究期間 平成21・22年度
- 2 調査内容 平成21年度 低学年用C & S 質問紙によるプレ調査等
平成22年度 C & S 質問紙による本格調査等
- 3 調査対象 県内の小中学校・高等学校 計23校
研究への協力を得られた23校で学校学年単位で質問紙を実施
- 4 調査人数 のべ約11,000人にC & S 質問紙を実施
のべ約7,000人にQ - U (楽しい学校生活を送るためのアンケート)を実施

調査人数及び調査の内訳

	学年	C & S 質問紙実施のべ人数	Q - U 同時実施のべ人数
小学校	1学年～3学年	約2,200人	約2,000人
	4学年～6学年	約4,200人	約3,500人
中学校	1学年～3学年	約3,800人	約1,500人
高等学校	1学年～3学年	約800人	0人

* Q - U (楽しい学校生活を送るためのアンケート)は、学級集団や個の実態を把握するために広く用いられている標準化された質問紙である。

* C & S 質問紙の作成の基本的な考え方や詳細は「いじめや不登校を予防する学級経営改善に関わる研究」を参照。

調査結果をもとにした目安の設定と分布率

1 目安の設定

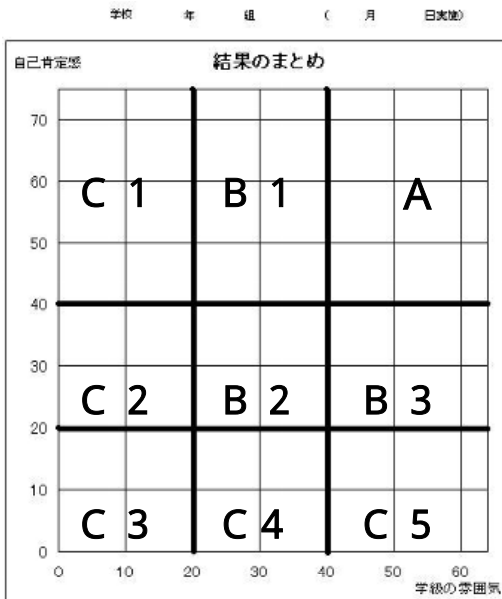


図1 目安の領域

質問紙の結果や学級の実態調査から見とりのために図1のように横軸「学級の雰囲気」の認知、縦軸「自己肯定感」ともに40及び20のラインで目安の領域を設定した。

Aは学級の雰囲気、自己肯定感ともに40以上の良好な状態の児童生徒がプロットされていると考えられる領域である。この範囲には、集団が安定し、かつその状態が継続している場合に多くの児童生徒がプロットされている。

C(C1～C5)は学級の雰囲気または自己肯定感が20以下で積極的な援助・指導が望まれる児童生徒が多くプロットされていると考えられる領域である。

B(B1～B3)は意識的な援助・指導が望まれる児童生徒がプロットされると考えられる領域である。なおB2にプロットされた児童生徒はB1、B3に比べCに近い。

9つの領域は、あくまで結果の見とりの補助、解釈の一助とするために設定した目安であり基準ではない。

2 小中学生約1万人のプロットの分布率

C 1		B 1		A	
小下	1%	小下	13%	小下	60%
小上	1%	小上	17%	小上	49%
中学	2%	中学	11%	中学	41%
C 2		B 2		B 3	
小下	1%	小下	11%	小下	14%
小上	2%	小上	15%	小上	15%
中学	2%	中学	18%	中学	24%
C 3		C 4		C 5	
小下	1%	小下	1%	小下	1%
小上	1%	小上	1%	小上	1%
中学	1%	小下	2%	中学	1%

図2 分布率

小中学生約1万人のC&S質問紙の結果を9つの領域へのプロットの分布率として算出した(図2)。

小学生は発達段階及び用いた質問紙の違いから3学年ごと小学校下学年、小学校上学年に分けて示した。(小学校1年生から3年生は新たに作成した下学年用の質問紙を用いて実施している。)

図2では小学校1年生から3年生を小学校下学年とし「小下」、4年生から6年生を小学校上学年とし「小上」、中学生を「中学」としてそれぞれの分布率を表示した。今回、高校生の分布率については提示しない。
*図2以下、分布率が1%未満の場合は1%と記載することとする。

Q-Uを同時に実施した約7千人の結果について

C 1		B 1		A	
小下	1%	小下	13%	小下	60%
小上	1%	小上	15%	小上	51%
中学	1%	中学	10%	中学	42%
C 2		B 2		B 3	
小下	1%	小下	9%	小下	14%
小上	2%	小上	14%	小上	15%
中学	1%	中学	17%	中学	25%
C 3		C 4		C 5	
小下	1%	小下	1%	小下	1%
小上	1%	小上	1%	小上	1%
中学	1%	小下	2%	中学	1%

図3 Q-Uを同時実施した児童生徒の分布率

表1 Q-Uの全国平均と7千人の結果比較(単位%)

	小下学年		小上学年		中学校	
	全国	今回	全国	今回	全国	今回
満足群	41	52	38	50	35	54
非承認群	18	20	18	20	15	20
侵害行為	18	12	18	11	17	10
不満足	23	16	26	19	33	16

表1のQ-Uの4群の分布率の比較から、今回調査した多くの学級が全国平均を上回る結果であったことが分かる。また、図2及び図3の分布率を比較すると同様の結果を示していることから図2、図3に示した分布率は平均的な学級の数値を上回る数値であることが分かる。

C & S 質問紙の分布率の詳細及び発達段階による分布の違い

図2及び図3の分布率が平均的な学級での分布を上回っていることから、実態把握の一助としてより詳細な分布率を図4から図6に示す。これらの図は小学校下学年、小学校上学年、中学校の結果を同時に実施したQ-Uの満足群の百分率をもとに から の3グループに分け、それぞれのグループのC & Sの分布率を集計したものである。また、数値だけでは把握しにくい各発達段階のプロットの分布の特徴についても同時に紹介する。 は満足群が60%以上の学級、 は満足群が60%未満40%以上の学級、 は満足群が40%未満の学級のグループである。

C 1	B 1	A
1%	3%	78%
1%	14%	60%
1%	21%	46%
C 2	B 2	B 3
1%	3%	14%
1%	9%	15%
2%	15%	14%
C 3	C 4	C 5
1%	1%	1%
1%	1%	1%
1%	1%	1%

図4 小学校下学年の分布率

C 1	B 1	A
1%	8%	65%
1%	16%	54%
2%	22%	35%
C 2	B 2	B 3
1%	6%	19%
1%	16%	14%
3%	22%	14%
C 3	C 4	C 5
1%	1%	1%
1%	1%	1%
1%	2%	1%

図5 小学校上学年の分布率

C 1	B 1	A
小下 1%	6%	51%
小上 1%	12%	39%
中学 1%	13%	33%
C 2	B 2	B 3
小下 1%	13%	25%
小上 1%	18%	25%
中学 2%	21%	24%
C 3	C 4	C 5
小下 1%	2%	1%
小上 1%	2%	1%
中学 2%	3%	1%

図6 中学校の分布率

< 発達段階のプロットの特徴 >

小学校下学年ではプロットが拡散する傾向がやや弱く、自己肯定感が高い児童が多い。

小学校上学年では、プロットの拡散する傾向が下学年に比べ強くなり、自己肯定感も拡散する傾向が見られる。分布1～分布6に例示した分布に近いのが小学校上学年である。

中学校では、拡散する傾向がより強まる。自己肯定感の差は大きくなりプロットは縦のびの傾向を示す。学級集団の状態が良好でプロットが右側に集まっている学級でも、B3にプロットされる生徒が多くなる。また、小学校に比べプロットがやや左下に集まる学級が多くなる。

高校生では、縦伸び傾向が中学校に比べ緩和し、中学校よりやや下に集まる傾向を示す。

なお、これらの分布率はあくまで参考であり、実態を正しく把握するためには、日常観察等を加えて総合的に判断することが大切である。

例えば、図7の学級は、Q-Uでは、満足群の児童生徒が約50%であった。しかしC&Sでは、Aの領域への分布率は10%程度であり、満足群の児童生徒はC&Sでは散らばった状態であった。この学級はある種のトラブルが頻発し学級の雰囲気が悪化している学級であった。

質問紙の結果は単純な数値の比較だけでなく、解釈しようとする姿勢が重要である。

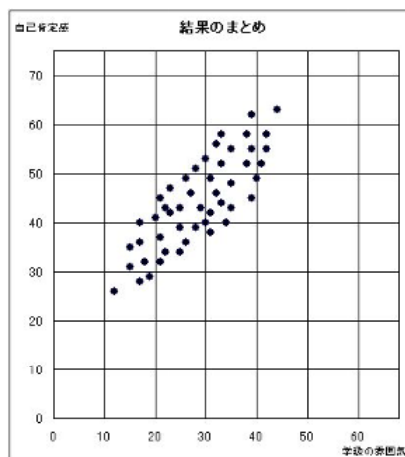


図7 分布イメージ

実態把握には

< 集団 >

- ・ 分布の形
- ・ 分布の位置

< 個 >

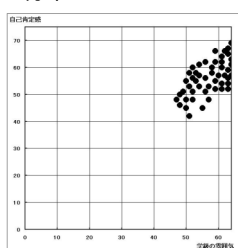
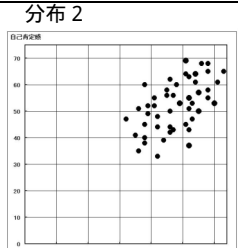
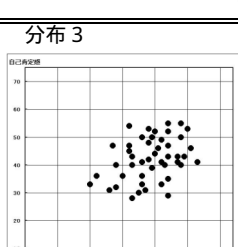
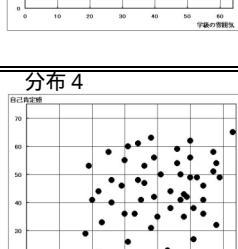
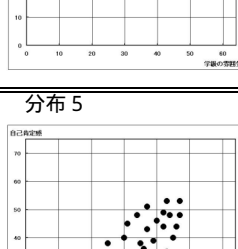
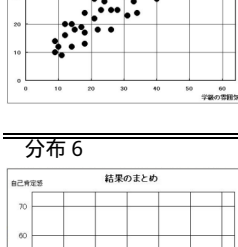
- ・ 絶対的位置
- ・ 相対的位置

の確認他に

- ・ 日常観察
- ・ 人間関係
- ・ 家庭の状況なども必要。

プロットの分布と援助・指導

1 6つの分布と学級の状態

質問紙の結果	分布の状態	調査結果に見えた学級の様子	援助・指導のポイント	
<p>分布 1</p> 	<p>右上に集まった集団</p> <p>自己肯定感が高い子どもが多い。 学級の雰囲気が良いと感じている子どもが多い。 学級としてかなりまとまっている。</p>	<p>学級生活に満足している児童生徒が非常に多い。良い状態が継続している。 きまりやルールが守られ、積極的に自己を表現できる雰囲気がある。 積極的に自己を表現しお互いに認め合うことで個々の児童生徒の自己肯定感が高まっている。 QUではプロットは右上に集まっている。</p>	<p>学級指導や生徒指導が実態に合わせて適切に行われている。 集団や個に対する援助・指導等が実態に合わせて適切に行われている。 学校や学級集団、地域等の要因が影響している場合もある。 中学校や高校では自己肯定感の拡散傾向等により出ていく分布である。</p>	<p>学級にまとまりがあり、集団として主体的に行動できる。その状態を維持発展させるために学級集団に対して継続的に援助する姿勢が大切である。 学級集団に入りきれず離れた個（プロット）が存在する場合がある。放置すると孤立する心配がある。積極的に援助していくことが望まれる。</p>
<p>分布 2</p> 	<p>右上に斜めに集まった集団</p> <p>自己肯定感の高低に多少の差が生じてきている。 学級の雰囲気への認知に多少の差が生じてきている。 学級としてのまとまりはある。</p>	<p>学級生活に満足している児童生徒が多い。 きまりやルールが守られ、自己を表現できる雰囲気がある。 認められる機会、活躍の機会などを通して個々が自己肯定感を維持したり高めたりしている。 QUではプロットの多くが右上に集まっている。</p>	<p>学級指導や生徒指導が実態に合わせて行われている。 集団や個に対する援助・指導等が実態に合わせて行われる。 児童生徒が自ら学級をより良くしていこうとするような援助・指導を行うことでよりよい状態へ移行する。</p>	<p>ルールやきまりを大切にしながら、児童生徒の主体的な考えや行動を尊重する。 集団や個のよさを認めながら学級集団を育てていくことが望まれる。 集団から離れた個や左下にプロットされた個への援助・指導が望まれる。 援助を指導をバランス良く継続的に行う。</p>
<p>分布 3</p> 	<p>座標の中ほどに集まった集団</p> <p>自己肯定感の高低にあまり差がなく、座標の中ほどに集まっている。 学級の雰囲気への認知もあまり差がなく、座標の中ほどに集まっている。 学級としてのまとまりは不十分である。</p>	<p>学級生活におよそ満足している児童生徒や満足できない児童生徒が混在している。 基本的なきまりやルールは守られている。 自己を積極的に表現する雰囲気が高くない。 ストレスを抱え小さなトラブル等が起きやすい。 QUではプロットの多くが軸の交点付近（中ほど）に集まっている。</p>	<p>学級指導や生徒指導に力が発揮されている。集団や個に対する援助・支援等はやや弱い。 直接的な指導や指導的な雰囲気を受けて集団が形成される傾向が強いほどプロットは集まる。 学級にトラブル等が少なかつたり抑圧感が少ない場合は右寄りに集まる。 管理的な面が強いと斜めにのびる傾向もある。</p>	<p>教師の直接的・間接的な力、影響を受けて形成されている傾向がある。 教師の影響力を生かしながら、主体的に考え行動する学級集団を育成していくことが望まれる。 拡散する力とまとめる力の均衡が崩れたり方向性がずれたりすると拡散していく可能性がある。 バランスよく援助と指導を行う事が望まれる。</p>
<p>分布 4</p> 	<p>プロットが大きく広がった集団</p> <p>自己肯定感の高低に大きな差がある。 学級の雰囲気への認知にも大きな差がある。 学級としてのまとまりに欠ける傾向がある。</p>	<p>学級生活に満足している児童生徒と満足していない児童生徒、トラブルにあっていない児童生徒やトラブルにあっていない児童生徒が混在しバラバラな感じが生じている。 きまりやルールなどは守られにくい。 QUではプロットが拡散していたり斜め型を示したりしている。</p>	<p>学級指導や生徒指導、集団や個に対する援助・指導が実態に合っていない。 拡散傾向が強くなるルールやきまりなどは無視されるようになり、教師の注意も届かなくなる。 トラブルが頻発する。 トラブルの増加にともない担任は対応に追われるようになる。他の教師の支援が望まれる。</p>	<p>勝手な行動をとる児童生徒が多くなることから、被害を受けている可能性のある周辺部に位置した個に配慮しながら、まず横の拡散を収束させるように努める必要がある。 きまりやルールを確認し、できることから徹底していくようにする。 状態によってはチーム支援が望まれる。</p>
<p>分布 5</p> 	<p>左下に向かって長く伸びた集団</p> <p>自己肯定感が高く学級の雰囲気が良いと感じる子どもから、自己肯定感が低く学級の雰囲気も悪いと感じている子どもへと伸びている。 学級としてのまとまりに大きな差が生じている集団である。</p>	<p>学級生活に満足している児童生徒と満足していない児童生徒がいる。 きまりやルールは表面上は守られている。 学級は当初は一見落ち着いた状態であるが、この状態が継続し左下が増加するとトラブルの増加、学級の雰囲気が徐々に沈んだものになる。 QUでは要因や形成過程により分布は異なる。</p>	<p>学級指導や生徒指導、集団や個に対する援助・指導等が行われているが実態とのずれや実態に対する不足が考えられる。 集団をまとめようとする動きと、阻害する動きが存在するため、援助や指導の効果が出にくい。 インフォーマルリーダー等が学級の雰囲気に影響を及ぼしている場合もある。</p>	<p>学級指導や生徒指導、集団や個に対する援助・指導を見直し有効なものを継続するとともに、新たな手だてを導入する。 学級集団や個の実態とともに、男子、女子等の集団などを見直してみる。 男子や女子の一方に分布5のような階層化が生じる場合もある。実態把握をもとに援助・指導の見直しが望まれる。</p>
<p>分布 6</p> 	<p>左下に集まった集団</p> <p>自己肯定感が低い子どもが多い。 学級の雰囲気が悪いと感じている子どもが多い。 学級としてのまとまりに欠ける。</p> <p>* 分布 6 はH21・22年の調査をもとに加わえた分布</p>	<p>学級生活に不満をもっている児童生徒が非常に多い状態である。 きまりやルールが守られず勝手な行動が目立つ。 一部または多くの児童生徒が教師の指示に従わずトラブルが頻発する。 自分を抑え生活する中、不満や不安から攻撃的な行動をとる場合もある。 QUではプロットは左下に多くが集まっている。</p>	<p>学級指導や生徒指導、集団や個に対する援助・指導等が実態に合わせて行われていない。 ルールやきまりなどは無視され、この学級の状態を招いた教師への不満も抱える。教師の話や注意は児童生徒に届かない。 担任は頻発するトラブルへの対応に追われる状態であるため、他の教師の早急な支援が望まれる。</p>	<p>担任は頻発するトラブルや個への対応に追われるため、集団への援助・指導が難しい。学年や学校での組織的な援助・指導が望まれる。 ストレスや不満を抱える児童生徒が多いことからいじめや不登校の発生 가능성이高く、十分な注意が必要である。 チーム支援が望まれる。</p>

2 発達段階における援助・指導の方向性

小学校下学年では、プロットが拡散する傾向がやや弱いことから、学級の雰囲気への認知に差が大きい場合には早急な対応が望まれる。学習指導や生徒指導を通してきまりやルールなどを守ろうとする気持ちを育て、高い自己肯定感を生かして集団及び個の育成を図っていくことが大切である。

小学校上学年では、子どもたちの自主性、主体性を尊重しながら実態に合わせた援助・指導を行い集団及び個を育成していくことが大切である。また、きまりやルールの確立とともに自らを表現する機会を保障し、お互いに認め合う機会を通して自己肯定感を高めていくことが大切である。

中学校では、縦伸びの傾向が強まるが、ここには思春期を迎えての不安定さも現れていると思われる。集団の育成とともに、個々の不安定さを受け止め支え合える人間関係づくりが必要である。

高校では、自己肯定感の縦伸び傾向が緩和されるが、中学校と比較してもやや下に集まる傾向を示す。1人1人の自己肯定感を高めていくような援助が望まれる。特に中学校や高校などにおいては、教師からの承認だけでなく、友人等からの承認の機会を増やす工夫が強く望まれる。

いずれの発達段階においても、実態に合わせた集団及び個への援助と指導のバランスを大切にするとともに、よりよい人間関係づくりや規範意識を高める指導の工夫、授業改善などが望まれる。

3 特徴的な分布の例と援助・指導のポイント

<p>自己肯定感 結果のまとめ 学級の雰囲気</p>	<p>トラブルの頻発により学級の雰囲気が悪化している。自己肯定感を維持しながらも、学級内の雰囲気の悪化にともない、「学級の雰囲気」の認知も悪化し左に移行している。</p> <p>左下にプロットされた個への援助を行いながら、トラブルの解消に努めるとともに学級集団全体に対して援助・指導を行う必要がある。表面に出ない存在がトラブルを起こしたり学級の雰囲気を悪化させたり、インフォーマルなリーダーなどが学級の雰囲気に影響を与えたりしていることも考えられる。</p>
<p>自己肯定感 結果のまとめ 学級の雰囲気</p>	<p>左下に向けて押しつけられたような形のプロットの分布。児童生徒と学校や教師との対立が顕著な学級で、教師の注意や指示はなかなか通らない。不満やストレスを抱えて学級生活を送っているためトラブルも多い。精神的な対立に至った経緯を確認し改善に努めながら個々のトラブル等の解決・解消に取り組む必要がある。</p> <p>学級経営や生徒指導に対する不満だけでなく、多くの児童生徒が学習指導に対する不満を持っている場合もある。分かりやすい授業、楽しい授業など授業改善に取り組む必要も考えられる。</p>
<p>自己肯定感 結果のまとめ 学級の雰囲気</p>	<p>学級の雰囲気は、多くの児童生徒が集まっている集団がつくっている。しかし、その集団に入れない児童生徒が集団から離れてプロットされている。集団から離れた児童生徒への積極的な援助・指導とともに集団が個を包み込むような雰囲気づくりが必要である。</p> <p>左の例のように集団に入れない児童生徒がいる場合だけでなく、学級集団が幾つかに分離しているような場合もある。個への援助・指導とともに、学級集団を一つにまとめるような援助・指導が必要である。</p> <p>男女の一方だけが分離したり拡散したりする場合などもある。</p>

4 結果の見とりや質問紙の実施、集計にあたって

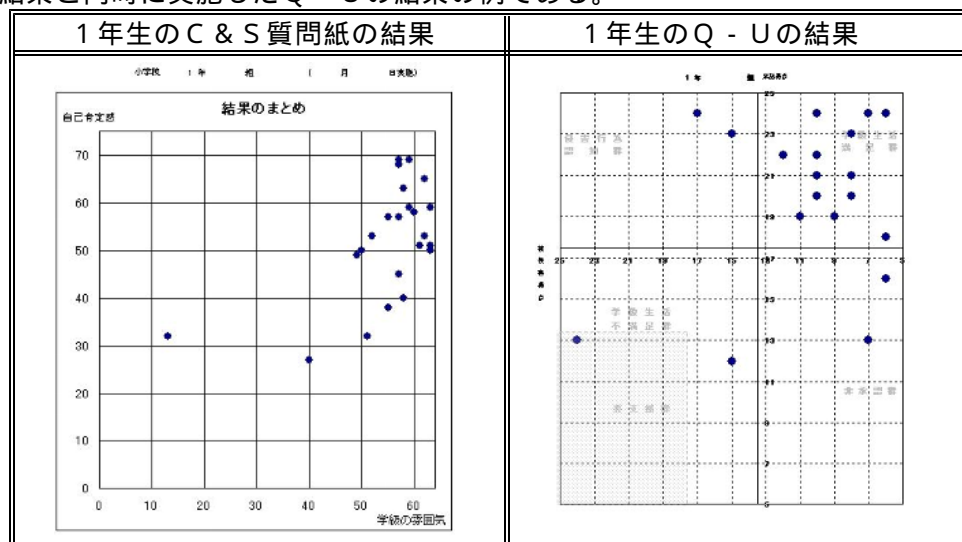
調査結果から、プロットの分布を6つの分布に類型化し学級の状態を示したが、実際の散布図は判断の難しい分布もある。「学級の雰囲気」の認知や「自己肯定感」などから集団を見直し、実態把握に努め援助・指導の方針を明確にし具体策を考えていく必要がある。

また、男女でプロットの分布の特徴が全く異なる場合もある。この場合には、集団及び個に対する援助・指導とともに男子・女子に対する援助・指導を考えていく必要もある。集計用には、男女別集計プログラムと男女混合用プログラムを用意しているが、男女別集計用プログラムの使用をすすめた。 「散布図シート」に表示されたデータを一時的に消すことで男女の分布の特徴を把握できる。

下学年用の質問紙の作成

下学年用の質問紙は、小学校用のC & S質問紙に補足説明を加えて作成した。補足説明は実際に下学年で実施する中で、分かりにくい部分や理解しにくい部分について説明を加えたものである。下学年用質問紙は、小学校用集計プログラムで集計することができる。なお、今回示した小学校下学年の約2,200名の分布率は、下学年用C & S質問紙によるものである。

下学年用のC & S質問紙は別紙(アップ版参照)の通り。図8は1年生で実施したC & S質問紙の結果と同時に実施したQ - Uの結果の例である。



設問の多さや文章の難しさなどに抵抗感を感じる先生方もいるが、今回の調査では、実施前の投げかけや実施形態の工夫などにより質問紙を楽しみながら行った学級、児童が多数みられた。

低学年においても質問紙の実施は実態把握の手立ての一つになると考える。

図8 質問紙の結果とQ - U

SQS版(マークシート版)C & S質問紙及び専用集計プログラムの作成

学校や学年学級等で質問紙を実施した際には、迅速に集計しその結果をもとに実態把握に努めることが質問紙を一層効果的に活用することに結びつく。そこで実施及び実施後の集計が効率的にできるようにSQS版のC & S質問紙を作成した(アップ版参照)。

SQSは、学校評価支援システムとして県内の多くの学校で使用されているものである。用紙をリーダーでデジタルデータ化し読み取りソフトで記述欄の保存と回答欄の数値化ができる。しかし、このシステムでは数値化されたデータは保存されるが、C & S質問紙の結果を直接表示することはできない。結果を表示するためには集計用プログラムに数値を移さなければならない。今までの集計用プログラムを用いた場合には、数値化されたデータを並べ替えたり欠席の確認等を行ったりしてデータ範囲を分け、その後にコピーと貼り付けを行う操作が必要になる。これでは効率化を図ろうとして作成したSQS版の質問紙の集計操作が煩雑になるとともにパソコン操作の知識が必要となり目的を達成することができない。

そこで、SQS版専用のC & S質問紙集計プログラムを作成した。このプログラムは質問紙をリーダーでデジタルデータ化し、読み取りソフトで数値化した後に起動させると、自動的に男女別、番号別にデータを抽出して結果の散布図を表示するものである。集計用プログラムは小学校用、中学高校用に男女別、男女混合の2種類、計4種類を作成した。SQSの使用環境が整備された学校では、SQS用集計ソフトの使い方(SQS版C & Sの使い方参照)を確認しすぐに使用できる。

なお、SQSシステムの詳細などについてはインターネットで検索し確認して頂きたい。

まとめと今後の課題

本研究で行った調査における分布率や分布例の紹介は、学級経営改善に取り組もうとする学校や学級でC & S質問紙を活用していくために有効なものであると考える。しかし、現時点では、単純集計をもとにした資料提示であり、結果の分析が不十分な点多々ある。今後は多変量解析等を通して研究を深め質問紙の改善を図るとともに結果の見とり方や学級の実態(プロットの分布)に即した具体的な学級経営改善の方針や具体策を研究することが課題である。